

第5節 水難防除の碑と供養碑

1 流杉水天磨崖像—高さ1.3m、幅3.5m、奥行2.3m

安政の洪水によって流れてきた大転石である。現在の堤防から500m余りも離れた位置にある。巨岩の真中に幅60cm、高さ約80cmの光背型窪みをつくり、その中に八竜冠をかむり、右手に剣をとり左手に覇索けんを持って両足を踏んばっている水天像が彫ってある。

右には「明治二年八月建立」、左には「水除水神 村方安全」と刻んである。頭髮や裳に青く彩色のなごりがうかがえる。上流西番で堤防を切った濁流が大岩を流してきたと伝えている。県下で最も新しい磨崖仏であり、安政の大洪水の歴史の番人であり、その恐ろしさを子孫に伝える証あかしでもある。



写真3-4 流杉水天磨崖像
(前田英雄撮影)

2 西野新の石龕水神社

流杉の北隣西野新神明神社境内にある。凝灰岩の切石で造った屋根付の水神社である。

正面は「水神社」と刻み、背後に「安政六 己 未年 奉再造産社 月吉日 西野新村」ともある。もとは現在地より3.4km南にあったが、圃場整備の際に宮境内に移された。

安政6（1859）年大洪水後に再建したもので、以前から水難防除のために村人が建立していたものようである。



写真3-5 石野新石龕水神社
(前田英雄撮影)

3 立山温泉跡と本宮念法寺の供養塔

二基（念法寺と立山温泉薬師堂跡）の供養塔は、飛越大地震による鳶山の大崩壊の際に、立山温泉に宿泊していた椎夫や温泉人夫として働いていた36人が埋没遭難したことを供養する塔である。二基の供養塔は1963（昭和38）年に建立され、立山温泉にはヘリコプターで運ばれた。

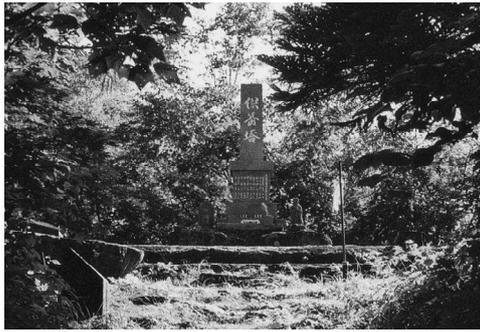


写真3-6 立山温泉跡
(前田英雄撮影)



写真3-7 2008年8月9日立山温泉遭難者慰霊祭
(前田英雄撮影)

地震発生から3日後に、山麓の上滝村肝煎五右衛門が人足20余人を引き連れ、鍬崎山に登って立山カルデラの状況を見分した。鍬崎山も山体の崩壊と地割れがあまりにもひどく、山頂に達した者は7人に過ぎなかった。その時、天正寺村十村彦三郎への報告書には、

- ・谷間へ埋る候分は何丈とも計り難い
- ・稼人（温泉に雇われた杣？）も此山抜けの下に相成申たと…
原村4人、本宮村は26人他に6人 〆36人…

と埋没者の氏名と数を報告している。

また、湯小屋と思しきところの四方が堤のように高くなり、水が三步ばかり溜まっていると、3月10日泥流流出の状況を有峰村から調査に向った肝煎と丸山（のちの長）の倅が十村から上新川御郡所と近隣の村々へ通報した。状況調査の結果を天正村十村次郎宛に報告した。

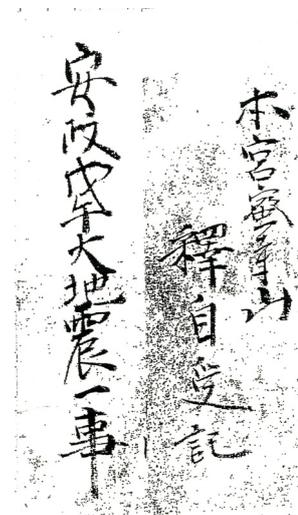


図3-11 本宮念法寺から平成19年発見

乍恐愚筆を願書附御達申上候

一、鬼ヶ所と中山一事大变成大抜ニ御座候。〈中略〉其外小抜数不相知難尽筆紙も右写の大変候得は前以御達申上候。稼人も此山抜けの下ニ相成申たと被思候故、依て稼人名前相調理書上申処左ノ通り御座候

(人名)	杣頭 原村 権助	… 四人
	本宮村	二十六人
	与柿沢村	一人等 (四人?)
	竹林村	一人

〆 三十六人

右等の義候得共 何卒宜敷御取計可被下候。奉願申上候 以上
安政五年午二月二十九日

上滝村肝煎 五右衛門 (花押)

2008（平成20）年、飛越地震から150年の今年、立山温泉の供養塔の前で原村・本宮村など36人の慰霊祭を行った。奇しくもこの時、本宮念法寺から初めての古文書が出てきた。念法寺住職佐伯自受がしたためたものであった。上滝村肝煎文書よりさらに詳細で、家族の関係や屋号もわかるものであった。

立山温泉元締人（経営者）利田村六郎右衛門は、山崩れ後の温泉跡の状況を再三見届け、温泉再開の可能性を地震からわずか2年後の万延元（1860）年と文久2（1862）年の二度にわたって注進したが、温泉開発されたのは明治2（1869）年で地震から11年後であった。

乍恐書附を以て御願申上候

立山温泉の儀 安政五年二月、地震にて変損仕申候に付其節

御注進申上置き候通に、御座候然る処、其後登山仕り温泉場所

見請^{うけ}申候処鳶山崩込み湯埋まり居候得共右ヶ所と拾三町計り

高きヶ所にて湯川南^{みなみべり}縁江、最前の湯沸き出居り候処に御座候

尤湯谷は嶮岨にも相成居候え共当春より毎度出水にて沙石等

流出申すに付き、湯本迄道作り立て候て入湯人通路の義指^{さしつかえ}支

申さず様に願奉り候故、此段申上奉り候間御聞届成し下され候様

願上げ奉り候、然る上は当時湯湧出候ヶ所ニ湯小屋出来仕り

道筋等以前の如く来春取り懸作立申し度存じ奉候間恐乍

湯小屋ならびに道作り立方の儀、御指図御渡下さる様書付を以て御願申上奉り候

以上

立山下温泉元締人

利田村 六郎右衛門

戊（文久二年、1862）

十月

表3-9 安政5(1858)年 飛越地震と立山温泉のその後

年号	西暦	事項
安政5	1858	2/26飛越大地震発生、鷲岳崩壊マグニチュード7.1、立山温泉埋没
"	"	2/28上滝村肝煎五右衛門、原・本宮村の人足20余人を引きつれ桑崎山に登山し、立山カルデラの状況を見分。山一面地震のため地割れし、頂上にたどりついたもの7人に過ぎず
"	"	2/29天正寺十村の報告内容、①大とんび小とんび南山不残麓より打ぬけ、字ナだし原・新湯小屋場・松尾と四ヶ所押埋め・・・②字ナ巣ごとと申山大抜けにて真川迄押入り・・・谷間え唯今埋り候分ハ何丈共難斗極大變の事二候③・・・稼人も此山抜けの下二相成申たと被思候故、依て稼人名前相調理書上申処左ノ通り御座候 原村4人、本宮村26人、弓柿沢村4人？、竹林村1人、ノ36人(累計35人)
"	"	3/15~16 月10日の泥流押し出し後の源流調査のため15・16日有峰村惣代(与三兵衛・同丸山倅弥助)と上滝村彦五郎状況調査に登山、天正寺十村、新川御郡所と近隣十村に通報す。「真川筋の水のまえ、湯川打合よりくし谷迄2里斗、松尾より大鷲迄三里斗の山抜け・・・湯小屋と思ひ候所四方高き中二水三歩斗相見得堤の様二相成、廻り一里斗可有御座と奉存候・至て水色青キ相見得申候云々」
万延元	1860	7月山崩後の温泉跡の状況を見届けのため人夫5人を登らせた。山崩れのため温泉は埋まり、湯元小屋あたりに湯少々を涌出していた右の外に新湯とおぼしき湯煙が所に立ち上っていた、利田村六郎右衛門→伊東孝四郎・神保助三郎宛(十村)
文久2	1862	10月温泉場所と見請けられるところに鷲山崩れで埋まっているが、十三町ばかり高き所に湯涌き出している。来春より湯小屋及び道作り御指図いただきたい。六郎右衛門
明治2	1869	利田村六郎右衛門(立山温泉元締)有峰村役人と温泉に用いる温泉入用の木材を伐り出す五ヶ年の請山の約定証文、年々式百貫文支払い。朽木兵三郎奥書→郡治局宛(新堀村十村)
"	"	立山温泉再開
" 10	1877	9/20深見六郎、第二大区小六区滑川組、戸長副書、立山温泉試験願→石川県権令宛。10/6聞届く。松平温泉？金沢病院医員検査、「立山松平温泉宣伝木版画発行、湯元(深見家?)」
" 10		「立山新道」について立山温泉湯元と契約。開通社出張所と牛小屋を温泉より借り受ける。
" 11	1878	7/24英大使館書記アーネスト・サトウ温泉一泊
" 22	1889	5月米人パーシバル、ローエル立山下温泉泊、針ノ木越え断念
" 24	1891	8/13・14、オランダ人技師デ・レーケと娘ヤコバ温泉泊。15日室堂へ。デ・レーケはダム建設を不可能と判断した。
" 26	1893	英人ウォルター・ウエトン大町側より来り一泊
" 28	1895	深見・舟橋村杉田六郎左衛門に温泉譲渡
" 44	1911	ドイツ人、Wシュタニツター一宿泊(このころ薬師如来像を閉湯中預ける)
大正6	1917	温泉、株式会社となる社長杉田八郎左衛門
" 8	1919	自家発電
" 10	1921	立山温泉(KK)代表取締役加藤熊雄
昭和18	1943	自家発電撤去
" 34	1959	電気設備なる
" 42	1967	立山温泉(KK)代表取締役に加藤熊雄、誠明兄弟となる(S44(1969)災害で一時的休止)
" 48	1973	温泉閉鎖
" 50	1975	廃湯
" 54	1979	温泉建物焼却さる

表3-10 安政戊年大地震一事による立山温泉埋没者一覧（本宮密寺（念法寺）釈自受記2／29記（5種））

原村					原村		年代別人数		
氏名	年齢	屋号	その他		本宮村	原村	本宮村	原村	不明
1 権助	59	権助	杣頭		28人	4人	5	1	
2 忠右衛門	46	仁左衛門倅			4人	1人	4		
3 久次郎	18	七右衛門倅			1人		7		
					計	36人	10	1	
							40代	2	1
							50代	2	1
							計	28	3
									不明
									1

本宮村					本宮村				
氏名	年齢	家族関係	屋号	その他	氏名	年齢	家族関係	屋号	その他
1 浅次郎	42	善助倅			15 与三右衛門	44		安兵衛	A
2 長七	19	長平二男	長右衛門		16 徳右衛門	50		徳右衛門	
3 与三左衛門 ・善三郎	53		与三左		17 長蔵	19	乃右衛門倅 ・万右衛門?		
4 善六	44			善四郎	18 九兵衛 ・九平	41		九平	
5 茂左衛門	39			茂右工門	19 基五郎	33	伝左衛門倅	伝右衛門	
6 鉄次郎	19	善左衛門倅	善右衛門		20 文右衛門二 ・清右衛門	49		文右衛門	
7 作蔵	19	作左衛門			21 文左衛門 ・久左衛門	46		文左衛門	
8 五平・宗八	33		五平		22 久三郎	21	文次郎倅		
9 兵左衛門 ・長左衛門	29		兵左		23 与三右衛門 ・善左衛門	46		与三右衛門	Aとの 関係?
10 仁助 ・徳四郎	32		仁助		24 源右衛門	42	(仁兵衛)仁平倅		
11 栄蔵	21		五郎左衛門		25 藤右衛門 ・徳左衛門	46		藤右衛門	
12 甚蔵	28	七兵衛倅			26 藤兵衛	31		藤右衛門	
13 金次郎 ・藤二郎	31		金次郎		27 藤吉郎	18	藤四郎倅		肝煎の 息子
14 与四衛門 ・和三郎	41		久左		28 源次郎	37		源次郎	

(註・は「又は」を意味している)

4 西番共同墓地の巨大転石に乗る供養塔

常願寺川左岸の富山霊園と隣接した西番村共同墓地の大転石（高さ4.5m、長さ6m、周囲20m、重さ推定187トン）の上に石塔が建てられ、一際高く聳える供養塔である。



写真3-8 西番共有墓地内転石上の供養塔（前田英雄撮影）

供養塔面正面

右に光明真言六百万遍

中央に大日如来坐像 供養塔

左に弥陀宝号六百万遍

塔後面の銘文

為横死諸聖霊等無上仏果出

万延元年申年 願主□古眞恵

七月□建立焉施主 某中敬白

「無上仏果出」とは、大洪水で犠牲となった人々に対して、六百万遍の光明真言と弥陀宝号を唱え供養し、無上の仏果が出ることを祈願する意味のようである。

真言宗と浄土宗の名号が併記されているのは、それぞれの犠牲者の宗派を意識した（平井一雄氏解説）。

5 新庄広田用水公園遭難供養碑

春の農耕期を迎え、広田・針原用水水請けの村々は用水の枯渇していることに驚き、用水掘り上げ通水のため、荒川の取入口である大場前へ村役人や工事の人夫を村々から動員して派遣して作業に当たさせた。4月26日午後2時すぎ、突如襲ってきた大洪水の瀬先に人夫は一瞬のうちに呑み込まれた。広田・針原用水関係者64名が犠牲になった。

1890（明治23）年4月、犠牲者の三十三回忌に当って遭難供養碑が建立された。



写真3-9 広田用水水難者三十三回忌供養碑
（前田英雄撮影）
1890（明治23）年建立

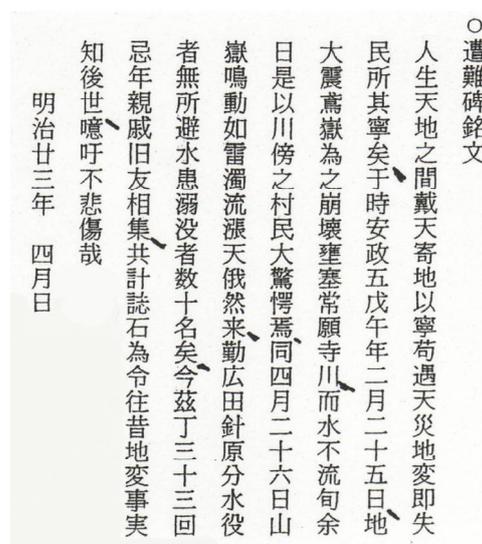


図3-12 遭難碑銘文

6 最大の大転石上に建つ水神

現存する大転石として最大のものである。高さ7.2m、周囲32m余。最初は真川・湯川の合流点にあったが、3月10日の泥流で横江地先まで流れ、4月26日の洪水で現在地まで流れた。この石によって水勢が変わり、下流右岸の被害を少なくしたといわれる。

西大森村の村民は、この石の恵みに感謝し、1915（大正4）年、碑を建てて護岸の神とし、祀るようになった。

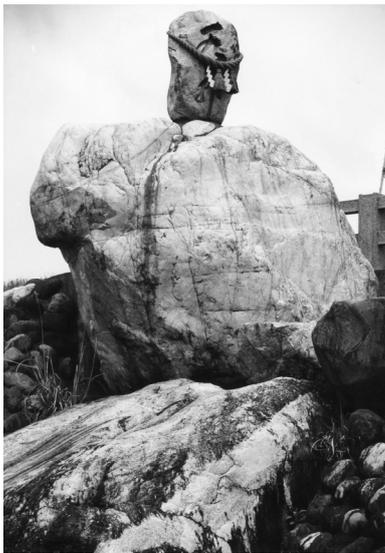


写真3-10 常願寺石岸大森堤防の水神

（前田英雄撮影）

1915（大正4）年建立



図3-13 西大森水神を祀った大転石状況図

（前田英雄撮影）



写真3-11 飛越地震による常願寺川左岸被災者、右岸高原野原野に入植開拓した150周年記念碑

（前田英雄撮影）

